The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Grammar of Kalanguya
Author(s)	Santiago, Paul Julian
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55717
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（Santiago, Paul Julian Cuizon）	
論文題名	A Grammar of Kalanguya (カランゲヤ語文法)

論文内容の要旨

本論文の目的は、フィリピン北部ルソン島周辺で話されているカランゲヤ語の文法を包括的に記述することである。カランゲヤ語が使用されている主な地域としては、ヌエヴァ・ヴィスカヤ州、イフガオ州およびベンゲット州が挙げられる。その他に、パンガシナン州北部およびヌエヴァ・エシハ州北部にもカランゲヤ語話者が暮らすようになったといわれている。

カランゲヤ語には子音音素が14個、母音音素が4個存在する。ベンゲット方言や借用語では、/s/と/r/が音素として使用されている。音節構造は基本的にCVやCVCで表すことができ、CVよりCVCもしくはCV:が好まれる。この傾向は、名詞および動詞の派生形の形態に大きく影響しており、子音重複、語中母音消失、軽音節消失などの音声および形態音素的変化の動機の一つともなっている。

カランゲヤ語は、他のフィリピン系言語と同様に、ヴォイスシステムと呼ばれる動詞形態論をもつ。この現象では、主格（Nominative Argument）の意味役割が動詞に付加されている接辞によって示される。本論文においては他動性をマクロロールの数で定義する。自動詞句にはマクロロールが一つのみ存在し、それに対して他動詞句にはマクロロールが二つ現れるというものだ。マクロロールの種類には、行為者マクロロール(Actor Macrorole)および非行為者マクロロール(Undergoer Macrorole)がある。行為者焦点（本論文ではヴォイスの代わりに「焦点」と呼ぶ）の動詞句に関しては基本的に、*on-*, *man-*, *maN-*の3つの接辞のうちの一つが動詞語幹に付加される。非行為者焦点は主格名詞句の意味役割に基づいて被動者焦点(PV)、 移動体焦点 (TV)、方向焦点 (DV)、場所焦点(LV)、受領者焦点　(RV)、道具焦点 (IV) の6つの非行為者焦点に分けることができる。

カランゲヤ語の句構造は主要部先行型、右枝分かれである。基本的語順はVS/VAOで、格標示のパターンは能格型寄りである。マクロロールに加え、斜格が動詞句に現れる2種類のExtended constructionsもある。自動詞句の場合はExtended Intransitivesと呼び、他動詞句の場合はExtended Transitives と呼ぶ。基本的動詞構文のほかに、動詞句の他動性の変化をもたらす結合価変化のプロセスがいくつか見られる。特に、受動態文、逆受動態文、使役文が挙げられる。基本的動詞構文と異なる性質をもつ構文も扱い、それらの特徴を記述する。カランゲヤ語におけるヴォイス交替をはじめ、情報構造や動詞のヴォイスとの間の関係を探るべく、形態論的のみならず意味論的・語用論的な側面からもヴォイスシステムの分析を行う。それに、フィリピン諸言語の中からカランゲヤ語が属するNuclear Southern Cordilleran語群にしか見られない直示的方向接語を徹底的に分析し、それらの機能と意味を明らかにする。カランゲヤ語では、接語が必ず動詞述語の後に付加するが（動詞述語＝接語）、それと真逆のケースが2つ存在する（接語＝動詞述語）。例を挙げると、基本的動詞文の語順はVS/VAOだが、名詞句が代名詞として現れる場合にSV/AOVという比較的珍しい構造がみられる。これは文法化したものであるとみなし、その文法化プロセスについて解明していく。これらの構文は元々［助動詞＝前接語　動詞］という形をとっており、その助動詞が「接語化」し、現在の形式に至ったと考えられる。

本論文は、全26章から成る。これを、序論を除き、第I部から第IV部に分ける。
第3章から第7章を第I部とし第I部では、当該言語の音素および音素系変化や音節構造を記述する。

第II部では、はじめに形態論的現象を扱い、動詞の活用表を提示する。第8章では、動詞や名詞から派生した、名詞を作る接辞について述べ、動詞の名詞化や重複についても検証する。第9章では動詞形態論と題し、ヴォイス接辞をはじめとする接辞の機能について検証する。第9章の前半では、分析的に検証を行い、後半では、特にテンス・アスペクトに注目して総合的に検証する。カランゲヤ語では大きく分けて3種類のアスペクトが、動詞の活用によって表される。時制といった概念は副詞を用いて表すことができる。第10章と第11章では、それぞれ名詞マーカーと代名詞について、第12章では、副詞と小辞を扱う。第Ⅱ部の最終章では、数詞について述べる。

第Ⅲ部では、項構造と統語論について検証する。第14章では名詞句構造について、第15章では非動

詞句について詳細に述べる。カラングヤ語の非動詞句構文では、動詞以外のものが述部に存在する。名詞述語構文、存在文、時間的述語構文、および前置詞句述語構文という4種類の非動詞句構文があり、名詞構文をさらに分けると四つのタイプがあることが明らかになった。

動詞句の結合価パターンと項構造については第16章で、疑似動詞と助動詞については、それぞれ第17章と第18章で述べる。擬似動詞句というのは、統語的にみると動詞句と異なる要素はないが、述語を活用せずに用いることができ、動詞のように項を取ることができる。しかし、述語として使われる擬似動詞は普通の動詞としても使えるという点が、擬似動詞句と助動詞句の大きな違いである。というのも、助動詞は接辞をつけることができないが、擬似動詞は普通の動詞句で使う場合は接辞をつけなければならないからである。第19章から第22章にかけて、複文構文についてまとめる。第19章では、補文について考察し、主要部と補部の間の意味的関係をベースに種別する。さらに補文に使用されるリンカー(*ni* と*ay*), や補部の動詞述語の形式などについても記述を行う。第20章では、3つの主要な等位構造について検証する。連結接続的等位構文(And-等位構文)の場合に使用されるリンカーは*tan*、*et*、および*men*のうちの1つであり、それぞれの使い方や容認されている組み合わせなどを明らかにする。当該言語にはInclusory pronominal constructionという構文も存在し、その統語構造についても記述する。選択接続的等位構文には*ono*が使用され、反意接続的等位構文の場合は*nem*もしくは*men*が使用される。

第21章では、副詞的従属節について、第22章では関係節をあつかう。補文と異なり、関係節には*ni*のみがリンカーとして用いられる。主要部名詞のない(“headless”)関係節も頻繁に使われており、このような構文にはリンカーが不要である。第III部の最終章では、否定文について述べ、3つの否定詞の使い分けを説明する。

第IV部では、意味論、語用論、文法化について特殊な例を挙げる。第24章では、情報構造やヴォイス交替を扱う。この章では、ヴォイス交替に関しては項の意味的役割のみならず、情報の新旧（特に非行為者マクロロールの定性）も重要となってくることを明らかにする。第25章では、カラングヤ語における2種類の直示的方向接語について詳細に検証する。第26章では、前接語が動詞述語に先行するという比較的珍しい構造をもたらす2つの助動詞の接語化について動機づけをする。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ Santiago Paul Julian ）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
主 査	教授	大 上 正 直
副 査	准教授	加 藤 昌 彦
副 査	准教授	原 真 由 子
副 査	教授	米 田 信 子
副 査	准教授(国立民族学博物館)	菊 澤 律 子

論文審査の結果の要旨

「A Grammar of Kalanguya（カランゲヤ語文法）」と題された本博士論文は，フィリピン北部ルソン島周辺で話されている少数言語であるカランゲヤ語の文法的諸特徴を，3年間で合計5回におよぶフィールド調査において約30人のインフォーマントや民話などのテキストから収集した膨大なデータを駆使して音韻論，形態論，統語論および意味論の観点から489ページにわたって包括的に記述・分析した労作である。この言語に関するこのような試みは過去に例がなく筆者がはじめてである。

第Ⅰ部（第3章～第7章＜音素・音素変化・音節構造＞）では，14個の子音音素および4個の母音音素が存在することを紹介した上で，音節構造が基本的にCVあるいはCVCであること，子音重複，語中母音消失などの音韻的特徴があることなどを具体的な事例を挙げつつ記述している。

第Ⅱ部（第8章～第13章＜形態論＞）では，接辞の機能，アスペクト，限定詞，代名詞，副詞などについて詳述している。とくに，この言語が6つのヴォイスを有し，行為者ヴォイスが自動詞文となり，非行為者ヴォイスが他動詞文になることを，名詞句のマクロロール（一般的意味役割）を使って説明している。ちなみに，自動詞文には動詞語根（語幹）に3つの限定的な接辞が付加され，マクロロールが1つのみ存在し，一方の他動詞文には主格名詞句のマクロロールに基づいてそれぞれ個別の接辞が動詞語幹に付加されマクロロールが2つ出現すると記述している。

第Ⅲ部（第14章～第23章＜項構造・統語論＞）では，名詞句構造，非動詞句，名詞述語文，存在文，前置詞句，動詞句の結合価パターンと項構造，擬似動詞と助動詞の比較，複文，補文に使用されるリンカー，否定文，等位構造，従属節，関係節，などについて記述している。とくに，当該言語は基本的語順がVS/VAOであり，各標示のパターンが能格寄りであることに加えて，一般的な自動詞文とantipassive（逆受動文）の双方が存在し，これらがそれぞれ異なるタイプの文であると指摘している。

第Ⅳ部（第24章～第26章＜意味論・語用論・文法化についての特殊な事例＞）では，情報構造とヴォイス交替などについて記述しており，ヴォイス交替が名詞句の意味役割のみならず情報の新旧も重要な要素になることを明快に解析している。また，2種類の直示的方向接語の振る舞いについて詳細に考察し，それらの機能と意味を明らかにしている。さらに，通例VS/VAOとなる基本的語順が，２つの環境（動詞が未完了相であるかGo「行く」構文の場合）の下で人称代名詞が現れると，SA/AVOになるという極めて特異な現象が見られることを新たに提示するとともに，これは元の「助動詞＝前接語　動詞」の助動詞が前接語化し，現在の形になったものと考えられるというふうに分析している。これに関連して，通例人称代名詞の属格＋主格名詞句という文の構造が第1人称代名詞のときにのみ主格＋主格名詞句になるという，フィリピンの他の言語にはほとんど見られない現象が生じることも明らかしている。

上記のように，本論文は極めて広範な領域をカバーするものであり，これまでフィリピン諸語研究では触れられることのなかった新たな現象や事実などが少なからず盛り込まれている。その意味で筆者が当該言語の研究に取り組み先鞭をつけたことで得られた新たな知見は，フィリピン諸語研究，ひいてはオーストロネシア諸語研究の今後の学術的な発展に大いに寄与するものであり，極めて高く評価できる。本論文にはプレゼンの仕方，構成，用語の定義などの面でもう少し工夫を要する箇所が散見されたのは事実である。しかし，これらの点は論文自体の学術的価値を本質的に損なうものではない。

以上の論文審査の結果を踏まえ，本博士論文が本学において博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断し，審査委員会は全員一致で合格との結論に達した。